

無縁の慈悲

有縁の慈悲は、「一切衆生はかつて私の両親だったことがあるのだ」という考え方を育むことで生じるものじゃ。自分が出逢う人すべてを家族だと捉えることで、そういう考え方に慣れてくる。たとえば、自分より年上の人を自分の母親や父親だと捉え、自分より年下の人を自分の子どもだと捉え、自分と同年齢の人は自分の兄弟だったり姉妹なんだと捉えること。一切衆生への慈愛に到達するまでこの考え方を育むことじゃ。有縁の慈悲というのは対象を必要とするものなのじゃよ。

自心の本性に安住したときに、無縁の慈悲が生じる。どうしたらいいかというとな、自心の本性を悟るとき、それは極楽の経験であり、大楽なのじゃ。そのときに、この経験から、大楽は実際に存在するのだが、無数の衆生がまだ自心の本性を了悟していないということを理解するようになる。自心の本性を了悟していないものは誰であれ、大変な苦しみにあるのじゃ。ふつう私たちは、たとえば、金持ちはとても幸福でたいして問題を抱えていないものだと思うものじゃろう。金持ちもときには一般人以上に苦しむことがあるという事実にもかかわらず、そのようには思っていない。早い話、自心の本性を証得していない者は皆、苦しみの中にある。真実と大楽とを同時に証得できたとき、限りない慈悲が生じる。無縁の慈悲は、慈悲の対象を必要とはしないのじゃ。

そうした大慈悲が生じるためには、何よりもまず心の本性を証得する必要がある、そのためには、いかなる考えも受け入れもせず排斥もしない状況で、考えや煩惱がどのようにして永遠の覚性の不動の虚空の中に溶け込んでいくかを体験する必要があるのじゃ。

これぞ至福の本性じゃ。これを悟ることで、まだ悟ることのできていない全ての衆生への、無縁の大慈悲心が生じる。この自然な大楽の本性を証得しなければ、必ず苦を受けることになるのじゃよ。無縁の大悲の大なる宝の蔵、観世音菩薩に礼拝します！

(丸山博貴訳)